

国立のぞみの園とは？

「1960年代に障害の重い子どもたちを育てている親たちの運動」から生まれた国立施設です。

「重度・最重度の知的障害者」「知的障害と身体障害を併せ持つ重度・重複障害者」が全国44の都道府県から集まりました。

国の検討委員会を経て、重い障害のある人たちの自立を支える総合施設として2003年「独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園」に生まれ変わりました。



左から、理事の古川慎治さん、事業企画課 課長の清水清康さん。

かんどう 巻頭インタビュー



独立行政法人国立重度知的障害者総合施設

のぞみの園 理事 古川 慎治
事業企画課 課長 清水 清康

所在地：群馬県高崎市寺尾町2120番地2

TEL：027-325-1501



群馬県高崎市の広大な山々に囲まれた緑豊かで穏やかな環境。

国立のぞみの園の入所者の方々は、どのような経緯で来られたのですか？

昭和46年に国立コロニーを開所して、各都道府県から利用者530名を引き受けたのが始まりです。関東と新潟県だけで、利用者の6割を占めていました。その後、徐々に亡くなり、地域移行も進んでいき、現在の入所者は167名に。約20年前から始まった地域移行は、遠方の人、障害の軽い人から進めていきましたが、身内の人や亡くなり帰れなくなる人が一定数出てきました。そこで法人内に障害者グループホーム（以下「GH」）を立ち上げたのです。のぞみ本体（入所施設）からまずはGHに移行し、ゆくゆくは故郷のGHへということになったのですが、車椅子になったり重度化したり、故郷に受け入れ可能な事業所がなかったり、GHに留まるする人々が

出てきました。でも、高崎の街中に出てきて、入所施設からのなじみの人たちと一緒に暮らすのは本人たちにとっては楽しいこと。地元に戻ったことが本人にとって良かったのかと考えさせられるケースもあり、無理に帰すよりはここで暮らしていく、そのために法人が最後まで関わった方がよいのではないかと考えるようになりました。家族もそれを望んでいたのです。ここには、最後まで支えられる仕組みがありますから。週末に温泉入っておいしいビール飲んで帰ってくる、ということが出来るのがGHの良さ。そういう生きがいと保障していくのも自分たちの仕事です。

GHの高齢利用者さんは、どのような介護保険サービスを使っていますか？

デイサービスが多いですね。他には、訪問看護、福祉用具レンタル（ベッド、マット、車椅子、シルバーカー等）。訪問リハビリテーションを使っていたこともあります。

介護保険サービスへの移行はどのように進めたのですか？



左上から玄関、入り口には緑があって癒されます。間取りと手作りのとんとん相撲。

65歳になると使えるサービスが増える、と単純に考えます。生活介護からデイサービス（以下「DS」）に切り替えた方はいます。生活介護では若い人からお年寄りまで、軽度から重度まで、一律のサービスとなりがちですが、DSではプログラムが豊富にあり、例えばカラオケばかりやっているところでは、利用者さんが大喜び。お金の問題はあれども、本人の笑顔が一杯出る所がいいよね、と思います。DSはドア・ツー・ドアで送迎してくれるし、風呂にも入れてくれるので、人手の足りないGHは大助かり。受け入れ側にとっては「障害」の部分がハードルになるかもしれませんが、認知症の方々のお世話をしているわけだから、ポイントさえつかめば難しいことではない。最初の頃はGHの職員が本人にマンツーマンで付いて、障害特性に応じた食事やトイレ介助の仕方をDS



共有スペースには大きなダイニングテーブル、広くて綺麗なキッチン。

の職員さんたちに見せるなどして、スモールステップで移行していきました。慣れてしまえば、DSの職員さんは本人のことを理解し、本人も喜ぶ。ただ、高齢・重度化すると個性が高くなるので、それに対応できる仕組みが必要となります。受診同行が頻回となる中でDSへのマンツーマン指導を行えたのは、日中自由に動ける職員を配置できたからこそ。また、行動障害や自閉傾向の強い方に関しては、現場で支援する職員にその知識がないと、DSでは受け入れが難しいかもしれせん。

GHの職員は、加齢に伴う身体機能の低下に、どのように対応してこれたのでしょうか？

高齢化は自然の成り行きであ

って、徐々に対応を積み重ねてきました。入所施設の方でも、直接的な身体介護をやってきたわけではないので、力任せの移乗などをやって腰を痛める人が続出していったような状況でした。首から下がほとんど動かない人などをGHで受け入れるにあたり、GH職員は特別養護老人ホームや法人内の理学療法士、作業療法士からレクチャーや実技指導を受け、数ヶ月後には介護のプロと呼べるほどになっていました。

ヒヤリハットも学びのひとつ

GHの世話人は地域のおじちゃんやおばちゃんたちがやっているのですが、介護が日常になってくると、それぞれが学ぶようになります。「この人はどうやったらおいしく食べられるんだろう」と考えることが介護の入り口。管理者が教えれば済む話なのかもしれませんが、「実際にやってみたらわかないと分からない」というのが、当時の管理者のスタンスでした。ある時、刻み食と聞いて世話人がとりあえず包丁で刻んだものを出したところ、ドキッとする場面があ

った。すると、素人の世話人同士、「焦ったより、次はもっと刻もう」と言い合う。しかし包丁で細かく刻むのは時間がかかるわけで、管理者が「フードプロセッサーを使ってみたら？」と助言する、といった具合。また、車椅子の方に対しては「こうしないとご飯食べないから」と、腰をかがめて目を合わせて食事介助するようになっていきました。

「この人のため」に

世話人さんたちは、近くのスナックで飲み会をやるなど、仲が良くいさかいも少なかった。「こうしたら、こうなった」という実体験もよかったのだと思います。介護の仕方は、世話人同士で、必然的に引き継がれていくことになります。世話人は、利用者と一緒にいる時間も、人生経験も長い。「この人のため」を考えてくれる。だから余計な口出しをせずに世話人さんに任せる、というのが、当時の管理者の考え方でした。

今までに介護施設への転居はありましたか？転居を検討するきっかけ等が

あれば教えてください。

2件あります。精神疾患が重くなり食事も摂れなくなり、毎日点滴が必要となったため、やむを得ず入院して特養へ移られた方。この場合、24時間対応の訪問看護があれば、違っていたかもしれません。認知症の周辺症状が重くなり、のぞみ本体に戻っていたいたケースもありました。看取り事例はありません。元気だった方が朝亡くなられていた、というケースはいくつかあります。高齢化が進むとそういうケースは増えてくるでしょうね。職員のグリーンケアの必要性も感じています。

高齢になられた方をGHで支援していく際に、難しいと感じている部分を教えてください。

高齢化すると、活性が下がっていき、精神的にも落ちていきます。もともと個室ですし、関わりが持てなくなっていくので、生活の質が下がらないよう、支援者側が意図的に働きかけをしなければと思います。本人との距離が近く、本人の特性を知っているからこそその支援が

国立のぞみの園
ニュースレターはこちら



国立のぞみの園
ホームページはこちら⇒





個人の居室は日当たりも良く、大きな窓があり開放的。エアコンも完備。

できるのが、GHの良さです。

障害福祉サービスと介護保険サービスの使い分け
はどのようにされていますか？

まずは「本人を真ん中に置く」ことです。生活介護かDSかを選択する場合、受け入れ側が「いいよ」と言った所に、まずは見学に連れて行き、体験させて、本人に決めさせるのが大原則。そのような選択の機会を用意図的に作ってあげるのが重要です。おそらく千葉県でも、生活介護よりDSの事業所の方が圧倒的に多いと思いますが、まずは、障害と介護の事業所をリサーチするのが大事です。次に、アセスメント。本人が今よりもいい暮らしができるのはどちらか、本人の好みを保障でき

るのはどちらのサービスなのか。リサーチとアセスメントと意思決定支援は不可欠です。

行政機関と共に考えて行く。

なお、介護保険の要介護度は障害支援区分より低く出やすく、DSが使えないから生活介護を使わざるをえないという場合もある。障害福祉サービスと介護保険サービスの併用は認めないとしている行政に対してはケースバイケースで働きかけていくようにしています。また、65歳になる直前に介護保険への切り替えを告知してくる自治体はいまだに多いのですが、国からの指針には「本人の意向を無視して一律に進めることのないように」と明確に書かれているので、行政にも、一律に介護保険へと移行しないよう助言しています。

現状の日中サービス支援型GHが高齢・重度化した方の受け皿として十分に機能していない事についてどのように思われますか？

日中サービス支援型はいろいろな可能性を秘めていると思うのですが、それを活かせるだけの報酬体系にはなっていない。日中サービス支援型は、強度行動障害の方々を重度障害者等包括支援サービスを活用しながら支援したり、医療的ケアが必要な方々を個別に医療対応しながら看取りまで行うこと等ができる場所だと考えます。好事例を全国から拾い集めて発信していかなければと思っています。また、報酬に関しては基本の部分は動かさないので加算でとっていくしかありませんが、介護に対する報酬はないし、重度の方ほど加算が大きく、軽度の方ほど小さい。しかし、軽度には軽度なりの理由があり、大変さがある。その辺のところをそれぞれが国に対して声を上げていく必要があると思っています。

高齢障害者の方が安心して暮らせる環境の理想像があれば、お聞かせください。

終末期の準備段階として、2年前にACP（アドバンス・ケア・プランニング…人生会議）



ベランダ、廊下は広々としたスペースを確保。避難用滑り台があるので万が一にも安心。

という、本人、家族、医師、弁護士などから成る合議体を立ち上げました。意思決定支援の取り組みであり、高齢利用者全員が対象となります。ACPでは本人の昔の資料を調べて、近しい人から聞き取りを行うなどして本人のデータを積み上げ、「本人がいちばん楽しかったこと、好きだったもの」を提供して、表情などの反応を見ます。このようにして、本人が意思を決定できない場合でも、意思の推定は行うことができます。本人をまずは大切にします。ACPにより、職員の意識も変わってきました。医療との連携でどう支えられるかも重要で、このGHは看取りまでやるのが目標なので、看護師を2人配置し、看護師目線からも日々の支援を工夫しています。

国立のぞみの園
施設マップ⇒⇒



国立のぞみの園
アクセスはこちら⇒



準備と予防が大切

中古の戸建てやアパートタイプのGHの場合、2階の居室だと階段を昇れなくなるし、廊下もトイレも狭いので車椅子では入れない。このような状態像がある程度見越して準備する必要がある。2階の居室にいて火災が起きた場合にどうするかも考えておかねばなりません。予想できることはある程度予想して準備をしていかなければ間に合わない。高齢・重度化への対策は、準備と予防に尽きます。どのように工夫をすれば住み続けてもらえるかを考え続けなければなりません。

長く住んでいるから、GHがいい？

長く住んでいるから、住み慣れているからGHがいい、とい



共用の洗面台、トイレ、脱衣所にお風呂。こちら
も広く、手すりもあるので快適に使用出来ます。

うのは、支援者側の勝手な思い込み。高齢になると、バリアだらけのホームでは、ひとつの行動で疲れてしまう。「それでもここがいい」と本人が言ってくればいいのですが、言葉がない障害者には、勝手な思い込みはきついかもしれない。また、僕らが思うほど利用者さんの繋がりは強くなかったりします。ご家族は「お友達と一緒に」と望めますが、移行先で「○○さんと一緒に居たい」という話は出てこなかったりする。それよりも、本人の暮らしが良くなることの方が嬉しいです。ひとりひとり育ってきた環境が違うので、そこをちゃんと汲み取ってあげることが大事です。

最後に

彼らを幸せにするために僕らは仕事をしてきた、というのは譲りたくないところ。そういう思いのある人たちが作ってきた制度・仕組みの上に僕らはいく。制度・仕組みを変えていくのは並大抵なことではありませんが、この10年で大きく変わってきているのは事実。出せる声は出していかねばと思います。



おおいし（行動障害対応）
平均年齢：73.5歳
平均障害支援区分：5.6



いしはら（重介護対応）
平均年齢：73.4歳
平均障害支援区分：5.7

国立のぞみの園 グループホームのご紹介



のぞみ（重介護対応）
平均年齢：72.5歳
平均障害支援区分：5.9



やちよ（ASD傾向の方対応）
平均年齢：58.8歳
平均障害支援区分：6.0



くるん（比較的自立度が高い）
平均年齢：64.0歳
平均障害支援区分：5.8



国立のぞみの園
パンフレットのご案内

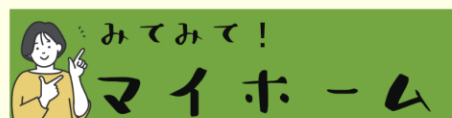


事業所について

「オハナ」はハワイ語で「家族」。利用者さんたちがフラダンスを習っていることもあり思い入れのある名前です。2ユニット型で主に知的障害のある女性を10名ずつと短期入所2名を受け入れています。平均障害支援区分は5.8と重度の方が多ですが、母体である障害者支援施設から移動してきた方々で家族史を語れるくらい深い関係の方たちばかりです。併設し



今回お話を伺った管理者の山田真由美さん(右)と主任生活支援員の田代実希(左)さん



社会福祉法人クローバー会 第2クローバー学園

オハナ館 (日中サービス支援型)

やま だ ま ゆ み
山田 真由美

住所：千葉県市原市馬立928-2

電話：0436-37-3620

H P : <https://kurobakai.com/clover2-campus/>

大切にしていること

開設当初、私含め職員も入所施設から異動したため、決まった日課やプログラムがあったのが当たり前だと思っていました。いかに施設っぽさをなくすか。職員の意識を変えることが課題でした。利用者さんは重度ではありませんが、長年一緒にいたからこそわかる、一人ひとりの個性や好みに合わせた支援を意識しています。入浴は時間制限なく、買い物もなるべく行けるよう調整します。そして「余暇活動をたくさん作って選んでもらう」ということは最も大事にしていることです。職員の得意を持ち寄り、クラブ活動(映画、お茶、ジェルネイル、料理：他たくさん)をしています。ただ、職員がやるのと



外観とリビング。お風呂は別事業として在宅での入浴が難しい方も利用しています。



耳掃除やマッサージでリラックス。地域の方との交流は自然と利用者さんも笑顔に。

外部の方がやるのでは利用者さんの表情が違う時もあるの、外部の方に来てもらう機会もたくさん作っています。フラダンス(先日雑誌に掲載されました)、耳掃除、大学生サークルのパネルシアター上映も行いました。なぜ繋がりを持てたのかというと、私が以前販売担当だった頃にイベントへ足を運ぶ経験をしていたからだと思います。現在もイベント情報を聞くと見に行ったり、SNSでフォローして依頼をしたり。すると福祉とは全く関係ない方たちの「何かやりたいけど、どうしたらいいの?」という思いに出会い、地域交流スペースを活用してもらうことに繋がります。最初は不安だった方も実際に利用者さんと触れ合うことで「癒された」「元気をもらえた」と言ってくれることがあります。繋がるツールとしてSNSでの情報発信も必要ですね。動画で

法人を紹介することで関心を持ってもらい、実習を経て毎年2~3名は新卒採用に繋がっています。利用者さんだけでなく職員も一緒に楽しく過ごせる環境づくりも重視しています。

地域交流スペースとは?

地域の方に無料で開放しています。現在は月に4、5日程度です。ウクレレ、フラダンスの練習等に利用していただき、場を提供する代わりに利用者さんにも披露していただくことで自然な交流が生まれています。実は今日もアロマをやっています。資格を取りたての方に来てもらい、利用者さんにとってはマッサージの機会を確保し、相手方には練習のお手伝いとなる関係です。特に車いすの方は足がむくみやすいので、やってもらう前後では全然違う!驚くほどスッキリします。

おわりに

山田さん自身「こんなに楽しんでいていいのか」ということもあったそうですが、いかに利用者さんの希望に沿えるかを追求した結果、今は「のんびりでもいいんだ」と思えるようになりました。たとおっしゃっていました。利用者さんだけでなく、職員の笑顔もあふれるオハナ館でした!

社会福祉法人クローバー会
第2クローバー学園 オハナ館
HPはこちら⇒



オハナ館
インスタグラムはこちら



き ど あい らく
起 努 逢 楽

各圏域を奔走するGH等支援
ワーカーを紹介するコーナー

市川圏域	かま いし 金石	たか ひろ 昂洋
野田圏域	ち だ 千田	ひろ み 弘美
君津圏域	やま ぐち 山口	ゆ き 祐樹



社会福祉法人 一路会
地域生活支援センターCan

金石昂洋
私はこれまで、高齢者入所や生活介護で認知症や知的障害の方の

直接支援や相談支援専門員として様々な障害の方をご家族や地域の支援者と連携しながら仕事をしていました。

元々相談員の時には圏域のGHWに相談することも多かったのですが、なんとなくGHWのイメージはありましたが、実際に中に入ると、新しく関わる分野の利用者、関係者と関わる機会が増え、日々覚えることだらけで頭が疲れています。

もうすぐ配属されて1年ですが、様々な方との関わりの中

ら、良い地域を作っていくための働きを意識することが必然的に増えてきたと感じています。このような経験ができる仕事はなかなかないと感じているので、今後も頑張っていきたいです。

社会福祉法人はーとふる
NOMAD 千田弘美

今年度より野田圏域のグループホーム等



支援ワーカーをさせて頂いておられます。福祉の現場で長く働かせて頂いてはいるものの、地域にどんなグループホームがどのくらいあるのか、グループホームの仕事がどんなものなのか全く知らなかったことに気づかされ、勉強の日々です。グループホームで生活されている方の安心した生活のために何が必要で、何をしたら良いのかなどいろいろな方との関わりの中で学びながら、一つ一つ丁寧に働き合っていきたいと思っています。よろしくお願いします。

中核地域生活支援センター
君津ふくしネット 山口祐樹
今年度9月1日から君津圏域の担当となりました山口祐樹で

市川圏域

介護包括型 GH 数：8 3 棟
日中サービス支援型 GH 数：5 棟

野田圏域

介護包括型 GH 数：7 2 棟
日中サービス支援型 GH 数：1 4 棟

君津圏域

介護包括型 GH 数：1 8 4 棟
日中サービス支援型 GH 数：3 4 棟



き たい と思
います。ど
うぞよろし
くお願い致
します。

す。以前は児童関係で仕事をしており、障害分野に関わるのは初めてになります。コーヒーとハイボールが好きです。家に一通りのコーヒー器具を揃えて、たまに豆を取り寄せてコーヒーを楽しんでいます。

以前の仕事で、様々な不安を抱えながら地域で子育てをしており、結果的に虐待に至ってしまった精神疾患をお持ちのお母さんと出会いました。その時の自分の無力感から、障害のある方に対する地域の支援をもっと知りたいとの思いでこの世界に飛び込み、GH等支援ワーカーになり約半年。まだまだ分からないことだらけですが、一つ一つの繋がりを大事に進進していきたいと思

今号の題字



さくら子庵株式会社 グループホーム 一步・三步 柴田 幸子さん

房総の穏やかな気候に囲まれた女性棟のホームです。畑で農作物を作ったり、アロマでリラクセスをしたりと和気あいあいと楽しく過ごしています。

編集後記

高齢化した障害者が地域で暮らすためのヒントを探すため国立のぞみの園に伺いました。地域移行を進める中でGHを立ち上げ、いち早く障害者の高齢化と向き合ってきた歴史には学ぶべきところが多くありました。

取材の中で「長く住んだ場所に住み続けたい、は支援者の思い込みの場合もある」という言葉にドキッとしました。利用者さんの今この瞬間の思いについて根拠をもった推定をすることができているか、意思決定支援を再考する機会となりました。

ねい等支援事業センター
ホームちゃん

GH等支援事業センター
X

元ワーカー

ねい等支援事業センター
Xのページ

千葉県障害者グループホーム等
支援事業連絡協議会

暮らしを拓く
55号

発行 / 千葉県障害者グループホーム等支援事業連絡協議会事務局

TEL / 0478-79-6919

MAIL / r-aoya@rosario.jp

発行日 / 令和7年(2025年)3月22日

編集 / 連絡協議会広報班